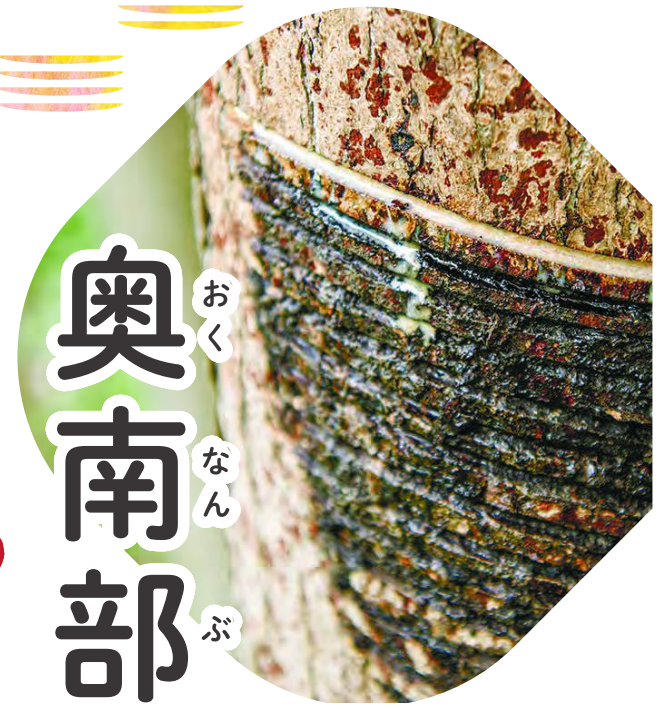
岩手日報

わくわく！ はっけん！

岩手日報 こども新聞

JAPAN HERITAGE
日本遺産



奥南部 漆物語

～安比川流域に受け継がれる伝統技術～

古くから漆産業が盛んな二戸市と八幡平市。
ウルシの木から樹液を採る漆掻き職人や、
木からおわんの原型を作る木地師、
そのおわんに漆を塗って漆器を作る塗師など、
今もたくさんの人が伝統を守っています。
地域で脈々と受け継がれてきた
歴史と技術を紹介します。

日本遺産ってどんな遺産 ―― 2ページ
“奥南部”漆物語を知ろう ―― 3ページ
漆器作りを支える仕事 ―― 4～5ページ
漆にまつわる歴史ストーリー 6～7ページ
未来へつなぐ取り組み ―― 8ページ

発行：日本遺産奥南部漆物語推進協議会　企画制作：岩手日報社広告事業局

〝奥南部〟漆物語が日本遺産に認定

日本遺産ってどんな遺産？

みなさん「日本遺産」を知っていますか？

日本遺産とは、日本の文化や歴史を世界にアピールするために、魅力ある文化や伝統を全国から選んで、文化庁が認定するものです。

昔から漆産業が盛んな二戸市と八幡平市の「〝奥南部〟漆物語～安比川流域に受け継がれる伝統技術～」は昨年6月、その日本遺産に認定されました。

日本遺産は、建物や場所が認定されるのではなく、文化や伝統を物語る「ストーリー」が認定されます。認定された二戸市と八幡平市の、漆をめぐるストーリーを一緒に学んでいきましょう。

日本遺産認定記者会見での藤原淳・二戸市長(右)と田村正彦・八幡平市長

タカッポくん

Q. 岩手県内には、他にも「日本遺産」ってあるの？

文化庁は2015（平成27）年から「日本遺産」制度を始め、これまでに全都道府県で104件を認定しました。本県では陸前高田市と平泉町、宮城県の涌谷町、気仙沼市、南三陸町の金産出の歴史を伝える「みちのくGOLD浪漫―黄金の国ジパング、産金はじまりの地をたどる―」が、2019（令和元）年5月20日に初めて選ばれました。

日本では奈良時代に初めて金が産出されましたが、それが本県南部や宮城県北部を含む「陸奥国」だったといわれています。また世界遺産の中尊寺金色堂（平泉町）や東大寺（奈良県）の大仏を彩り、祈りの対象とされてきました。時代とともに独自の文化や信仰、産業へと発展した「金」と「人々」のつながりを〝みちのくGOLD〟と名付け、取り組みを進めています。

中尊寺金色堂

Q. 世界遺産とは何が違うの？

世界遺産が「世界の宝物として守っていく必要のある地域の貴重な文化財や自然を保護して未来へ伝えること」であるのに対して、日本遺産は「地域の文化や歴史、自然を活用し、その地域の魅力を世界へ発信すること」です。

世界遺産と日本遺産を比較すると、世界遺産は「保護」を目的としていて、日本遺産は「活用」を目的としていることが大きな違いです。

つまり、日本遺産はこれまで大切に保存されてきた地域の文化財や自然などを、保存だけでなく活用して、国内だけでなく海外へも発信し、地域を活性化しようという取り組みです。

各地の日本遺産

四国遍路（愛媛県、高知県、徳島県、香川県）

忍びの里 伊賀・甲賀（滋賀県、三重県）

カムイと共に生きる上川アイヌ（北海道）

日本遺産に認定された〝奥南部〟漆物語のストーリー

民俗学者の柳田国男さんは自身の本の中で、八幡平市から二戸市へ流れる安比川流域を「奥南部」と呼んでいます。その流域には、昔から漆に携わる仕事をする職人がたくさん暮らしていました。上流域には、山に入って木を切り、ろくろを使っておわんやお盆を作る「木地師」が住んでいました。中流域には、そのおわんやお盆に漆を塗って漆器を作る「塗師」が、さらに下流域では良質な漆が採れるため、ウルシの木から樹液を採る「漆掻き職人」が多く住んでいました。

このように豊富な森林資源を生かしながら、川沿いの集落ごとに分担して、地域全体で漆器作りに取り組んできました。漆器は職人から職人へと手仕事のバトンをつなぐことで完成します。その一連の技術をすべてまかなうことができることも、この地域の特長です。八幡平市と二戸市では、今も大切に漆産業を守り続けています。

「漆掻き」技術がユネスコ無形文化遺産に登録

二戸市の日本うるし掻き技術保存会（工藤竹夫会長）を含む「伝統建築工匠の技　木造建造物を受け継ぐための伝統技術」が２０２０（令和２）年12月17日、国連教育科学文化機関（ユネスコ）の無形文化遺産に登録されました。

ウルシの木から樹液を採る漆掻きの技術は、漆器作りには欠かせない大切な技です。漆掻きは、カマやヘラなどを使って、ウルシの木の幹につけた傷からにじみ出る漆を少しずつ集め採る地道な作業です。

漆は樹齢や季節、天気によっても採れる量が変化し、一本一本の木の性質を見極める必要があります。良質な漆をたくさん採るには、高度な技術と、長年の経験を積んだ職人の技が必要です。

将来にわたって良質な国産漆を確保し、それを文化財の修復や継承に使っていくためには、漆掻き技術は欠かせない重要な技術であることが、世界に認められました。

職人が技術を受け継ぐ漆掻き作業

伝統の技と文化をつなぐ職人たち

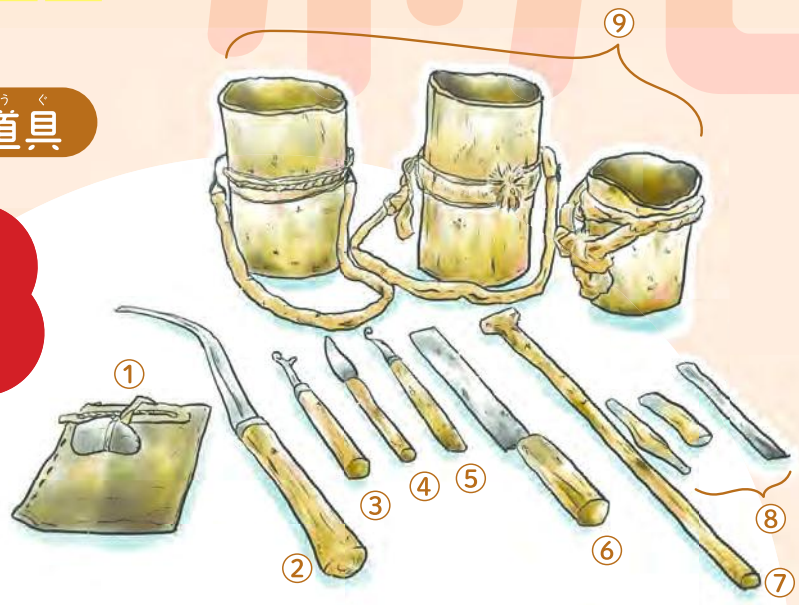
一滴一滴、にじみ出る漆を集める漆掻き職人。
採ったばかりの漆から、水分やごみを取り除く精製作業。
木の性質を見極め、ろくろを使って挽きものを作る木地師。
木地師が作った器に漆を塗って漆器を作る塗師。
このように、たくさんの工程と手仕事がつながって、一つの漆器が完成します。
漆器ができるまでの過程と、それぞれの職人の仕事内容を学んでいきましょう。

漆掻き

漆掻きの作業は6月から始まり11月上旬まで約半年間続きます。漆掻きには形の違う特別な道具を使います。木の表面を平らにするために皮を削る「カマ」。木に傷をつけて漆の樹液が出やすくするように傷を入れる「カンナ」。傷から出た樹液を掻き取る「ヘラ」。掻いた漆を溜めていく入れ物「タカッポ」などが主な道具です。道具は自分の手に合うようにそれぞれが工夫しています。

漆を掻くのは樹齢15～20年のウルシの木です。まずカマで皮を剥いで、カンナで木に傷をつけて漆の樹液を出し、ヘラで掻き取ってタカッポへ入れます。ベテランの職人は、この作業を1日約50本、1シーズンに約400本行います。1本の木から採れる漆は、わずか200ccほどです。採れる量は樹齢や季節、天気によっても変わります。良質な漆を採るには、経験を積んだ職人の技が必要です。

漆掻き道具



❶道具袋　❷カマ　❸カンナ　❹ヘラ　❺エグリカンナ　❻ゴングリ　❼油棒　❽砥石　❾タカッポ

漆の精製

ウルシの木から採れたばかりの樹液は「生漆」と呼ばれています。採れたばかりの漆には木の皮や木くずなどが混入し、水分が多く含まれ、成分も均一ではありません。

そこで、漆をかき混ぜて成分を均一化する「ナヤシ」や、漆を加熱して少しずつ水分を蒸発させる「クロメ」と呼ばれる作業を行います。

「ナヤシ」や「クロメ」を行った後、ごみをこし取って初めて「精製透漆」になります。この「精製透漆」は、「素黒目漆」とも呼ばれています。

ナヤシ　クロメ

木地師

木地師とは、木を削り形を整える道具であるろくろを使って、おわんやお盆などの木工品を作る職人です。木地作りは、丸太から木を切り出して器の原型を作る「粗挽き」と呼ばれる作業から始まります。

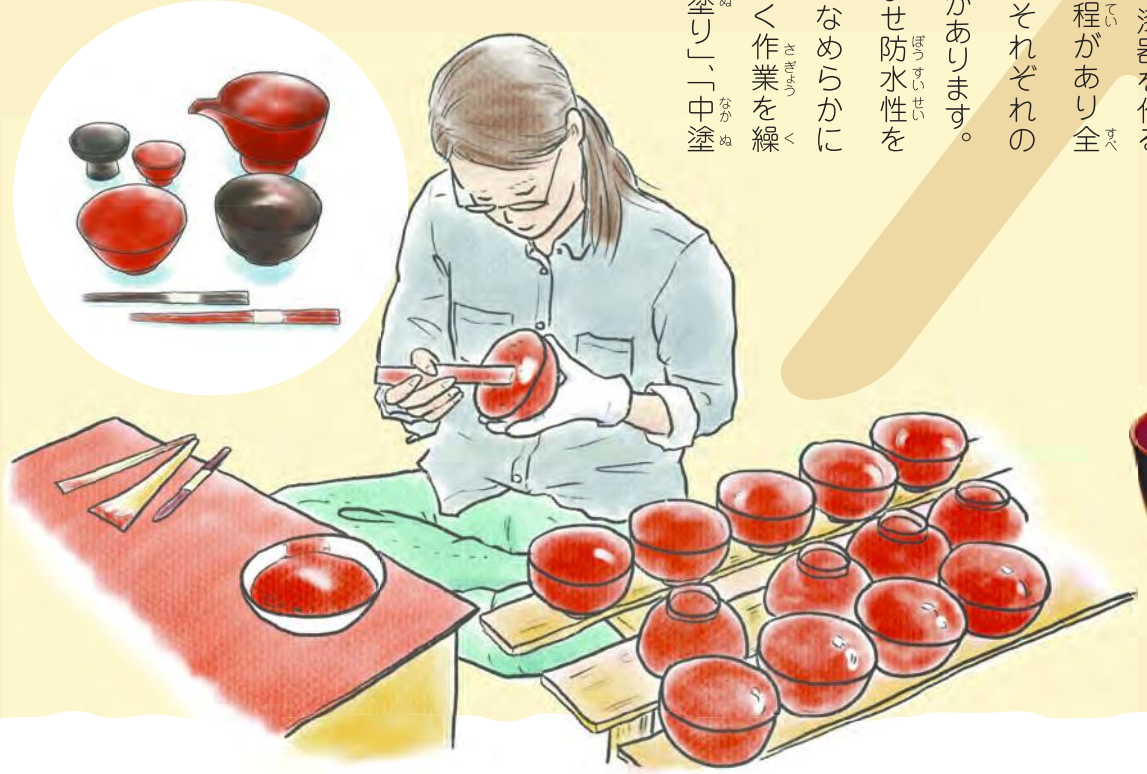
塗師がデザインしたおわんやお盆の図面をもとに、カンナや小刀を使い、ろくろで形作っていきます。使う人にとって心地よい形や厚み、感覚を考えて作るため、使う道具にもこだわっており、道具も自分で作ります。昭和の初めまでは安比川上流域の旧安代町に木地師が130人ほどいたといわれていますが、現在は岩手県内でも数人しかいない状況になっています。

塗師

塗師は、木地師が作ったおわんやお盆などの器に、漆を塗って漆器を作る職人です。たくさんの工程があり全てを一人で行う場合と、それぞれの作業を分業して行う場合があります。

木製品に漆を染み込ませ防水性を高める「木固め」、表面をなめらかにし何度も漆を塗っては磨く作業を繰り返して強度を増す「下塗り」、「中塗り」、最後は、ハケ目の跡を残さず美しく仕上げる「上塗り」。

このように、塗師が何度も塗って研いで漆を重ねることで、丈夫で美しく、長く使うことのできる漆器ができあがります。



一口メモ

浄法寺塗と安比塗

柔らかな口当たりと、手になじむ優しいぬくもりが特長の浄法寺塗や安比塗。現在は二戸市浄法寺地区で作られたものが浄法寺塗、八幡平市安代地区で作られたものが安比塗と呼び方が違っていますが、この二つの地域は昔から地域全体で一緒になって漆器作りを続けてきました。

一時作り手が減ってしまい、生産が途絶えたこともありましたが、どちらの市も伝統をつなぐために職人を育てることに力を注ぎ、浄法寺塗や安比塗として復活し、現在まで続いています。

どちらの漆器も、丁寧に塗り重ねられた漆が丈夫さと美しさを生み出しています。現代の生活に合うように、シンプルで飽きのこないデザインにこだわっています。

滴生舎
二戸市浄法寺町御山中前田23-6　電話0195-38-2511
https://urushi-joboji.com/life/tekiseisha

安比塗漆器工房
八幡平市叺田230-1　電話0195-63-1065
http://www.appiurushistudio.com/

Q.1 この地域で漆が使われるようになったのはいつから？

安比川流域で見つかった縄文時代の遺跡では、石刀だけでなく赤い漆の装飾がついた漆鉢（土器）も見つかっています。石刀は日常的に使われていたのではなく、祭祀など特別な使い道があったと考えられています。3千年以上も昔に生きていた縄文人も、漆を生活の中に取り入れていたことが分かります。

この地域がいつから漆の産地になったのかは分かりませんが、少なくとも奈良時代からこの地域を含む東北地方で漆を産出していたことが明らかになっています。

赤坂田Ⅰ遺跡から出土した漆を貯蔵していた鉢

上杉沢遺跡から見つかった「漆塗石刀」

安比川流域で見つかった縄文遺跡からは、赤い漆がついた石刀が見つかっており、この地域には太古からウルシの木が生育していたことを物語っています。漆は美しい漆器の塗料としてだけでなく、仏像や建物に装飾をする際の接着剤の役割も持ち、たくさんの神社やお寺に使われてきました。また、植物としてのウルシはその実がロウソクの原料にもなりました。戦後は生活様式の変化などで、一時漆器生産が途絶えてしまったこともありましたが、地域の人たちの努力で復活し、現代まで受け継がれてきました。安比川流域がその一大産地となった歴史や背景をたどってみましょう。

3千年以上も昔から、この地域では漆が使われていたんだ！

Q.2 漆は漆器以外にも使い道があったって本当？

江戸時代の盛岡藩では、漆を重要な産業と考え、生産を後押ししていました。漆や漆器だけでなく、この時代はウルシの実から蝋を取って作るロウソクも盛んに生産していました。そのため、漆の掻き方も現代の方法とは違い、「ウルシの木を長く生かしておき、樹液も採りながら、実も採る」という掻き方でした。このような掻き方を「養生掻き」といいます。盛岡藩のお殿様も漆を大切な資源と考え、この養生掻きを勧めていたことが伝わっています。

明治時代に入ると漆掻き職人の多かった福井県からの出稼ぎ職人「越前衆」が新しい道具や漆掻きの方法を伝えました。これまでの養生掻きに代わり、ウルシの木から樹液を最後の一滴まで掻き採り、一年で木を伐採するという「殺し掻き」が広まりました。このことで漆の生産量が大きく増え、この地域が漆の一大産地となっていきました。

ロウソクの芯

漆蝋（一番漆）

ウルシの実

キノミロウソク

漆蝋を生産していた当時の資料

一口メモ

浄法寺塗の漆器製作の起源は天台寺？

この地域の漆器作りの始まりは、奈良時代に建てられた二戸市の天台寺のお坊さんたちが、日々の食事に使うため作られた器と伝わっていますが、確かな記録は残っていません。

しかし、飾りけのほとんどない素朴で実用的な普段使いの器は、ぜいたくをせず静かに生活することを目的としたお坊さんの生活様式が育んだものと考えられており、今もなおその精神は受け継がれています。

浄法寺塗は、地元の人たちが親しみを込めて天台寺を呼ぶ「御山」という呼び方にちなんで、「御山御器」とも呼ばれており、天台寺との深い関わりを伝えています。

天台寺

漆にまつわる歴史ストーリー

Q.3 漆掻き職人が一時減ってしまったのはなぜ？

太平洋戦争の頃、漆は主に爆弾や砲弾などの塗料として重宝されていました。当時は外国からの漆の輸入が本格的に行われていなかったため、限られた量の漆に買い手が集まり、漆は高い値段でどんどん売れました。日用品や工芸品の塗料としての需要が高まりましたが、漆掻き職人が足りず、漆の生産が思うように伸びませんでした。そこで、漆の生産量や職人を増やすために映画も作られました。

漆の増産を目的に作られた映画「うるし日記」の一場面

しかし、戦後は外国から安い漆が大量に輸入されるようになりました。生活様式も変わり、プラスチック製品や陶磁器が広まったことで、家庭で漆器を買うことが少なくなると、漆の価格は下がり生産量も減ってしまいました。最盛期には300人ほどいた漆掻き職人も20人程度にまで減ってしまった時期もありました。漆器製作でも浄法寺塗は一時途絶えてしまい、この地域の漆産業は厳しい時代を迎えます。

Q.4 どうして国産漆の重要性が見直されたの？

国宝や重要文化財などの歴史的な建物には、昔ながらの資材が使われています。その修復には当時と同じ品質の資材を使うことが原則です。国は1950(昭和25)年に文化財を守る法律を制定し、さらに2015(平成27)年には文化財の補修には、国産漆を使うよう通達を出しました。

耐久性に優れ、質の良い浄法寺漆は、1951(昭和26)年に国宝建造物第1号に指定された中尊寺金色堂(平泉町)や金閣寺(京都府)、日光東照宮(栃木県)の修復などに使用され、日本の文化を支えるためになくてはならない存在になりました。

2007(平成19)年から始まった日光東照宮の修理修復では、6年間で約4トンの漆を使って塗り直しが行われ、浄法寺漆を100%使用しました。これが一つのきっかけになり、漆文化が再び見直され活気づきました。

日光東照宮

未来へつなぐ取り組み

生産量日本一を誇る浄法寺漆は、高い品質で国内最高級の漆とされています。その漆文化を守っていくために二戸市と八幡平市では、植樹活動や生産に携わる職人の育成に力を入れています。

漆文化を次の世代へと受け継いでいくために、まずは自分たちの住んでいる地域の歴史を知り、植樹に参加したり、家族や友達と普段の生活の中で漆器を使ってみたりと、できることから始めてみましょう。

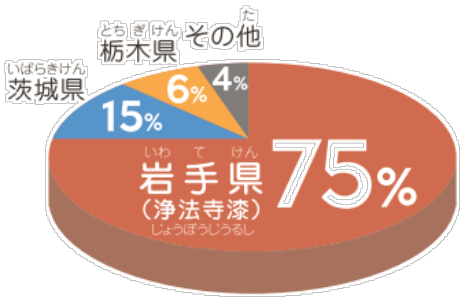
漆文化を受け継ぐ若き職人たち

日本国内で使われる漆の約95%は外国産で、国産はわずか5%ほどしかありません。なんとその国産漆の約75%が二戸市浄法寺地域と、その周辺地域で採れる「浄法寺漆」です。浄法寺漆は粘りや透明度、乾いた後の硬さから、丈夫で長持ちする国内最高級の漆とされています。

そんな地域が誇る漆文化を支えるため、二戸市と八幡平市は塗師や漆掻き職人の育成にも力を入れています。八幡平市は安代漆工技術研究センターで、木地制作から漆の精製、塗り、加飾などの指導を行っています。安比塗を制作・販売する安比塗漆器工房でも若い担い手が働いており、塗師で青森県六ケ所村出身の中村昂平さん(22)は「地域の人が大切にしてきた文化を守ることに役立てるなら、こんなにうれしいことはない」とやりがいを語ります。

二戸市でも滴生舎で漆塗り工程を公開しながら販売しているほか、漆掻き職人を育てるために地域おこし協力隊を募っています。この結果、県浄法寺漆生産組合の職人数は2015、2016(平成27、28)年の20人から増え続け、現在37人になりました。漆の生産量も2015(平成27)年の0.82トンから2019(令和元)年は1.49トンまで増えました。

国産漆の地域別生産率



出典元:林野庁統計調査(令和元年度産)

塗師の中村昂平さん

二戸市地域おこし協力隊の秋本風香さん

原木の植樹で漆文化を残そう

漆の生産は増えましたが、原木の確保が次の課題です。漆を掻けるまで成長するには15年ほどかかるとされています。二戸市は2022(令和4)年度までに年間2トンの生産を目指していますが、達成に必要な原木数は18万本です。市では企業や市民、地域の子どもたちと一緒に、毎年2万本ずつ植樹を続ける計画です。

山の手入れにも積極的に取り組む県浄法寺漆生産組合の泉山義夫組合長(71)は「漆生産を途絶えさせてはならない。多くの協力を得ながら、後世につなぎたい」と力を込めます。

ウルシの木を植樹する子どもたち

地域で大切に受け継がれてきた漆文化。
この宝物を守り、未来へとつないでいくために、
まずは私たちが漆文化を知って、
家族や友達にも伝えてみましょう。

日本遺産奥南部漆物語推進協議会(二戸市政策推進課内)　〒028-6192 二戸市福岡字川又47　TEL0195-23-3111(代表)　FAX0195-25-5160

※本文中の表記で「漆」は樹液としてや、作業としての漆掻きなどの場合に用い、木や植物としてを指す場合は「ウルシ」と表しています。

【参考文献】「木をつくり漆を掻く~鈴木健司の技~」、「いわての漆~縄文から現代まで 岩手に伝わる漆の文化~」、「漆器の歴史を訪ねる安比川の旅」、「いわての漆の魅力をさぐる」、「いわて漆の近代史」、「浄法寺町史」、「安代町史」
【取材協力】二戸市浄法寺歴史民俗資料館、八幡平市博物館、滴生舎、安比塗漆器工房、八幡平市安代漆工技術研究センター、挽きものhorimoku